

## 心理尺度と操作的定義を反省する

戸田山和久<sup>1)</sup>・山口裕幸<sup>2)</sup>・唐沢かおり<sup>3)</sup>

名古屋大学<sup>1)</sup>・九州大学<sup>2)</sup>・東京大学<sup>3)</sup>

心理学者の重要な仕事の一つに心理測定尺度の構成がある。社会心理学者である山口と唐沢も、研究上の必要性から、それぞれ「看護師チームのチームワーク測定尺度」、「自由意志・決定論信念測定尺度」を作成した経験をもつ。心理学内部では、構成された心理尺度の妥当性を検討するための手続きと基準にはほぼ合意がある。それらを満たせば、心理尺度として通用することになるのだが、当の心理学者にある種のためらいがあるのも確かである。それは、この尺度で何が測られたことになるのだろうか、そもそも何かが測られているのだろうか、測られているとして、その測定の質を向上させるためにはどうすればよいのだろうか、といった疑問に明確な答えをもてないでいるからだ。こうして、心理測定の科学哲学的分析が必要になる。

筆者たちは、社会心理学の方法論的再検討を進めてきたが、その中で、こうした心理尺度にまつわる問題が一つの重要課題であることに気づいた。心理学者が心理尺度の構成について日頃感じているある種の疑念ないし「割り切れなさ」を手掛かりにして、心理測定の科学哲学を構築していくことが当面の課題である。今回の報告では、そのためのごくささやかな作業を行う。

「そのテストで本当に **XX** (たとえば知能) を測ったことになるのか」という批判に対して心理学者がとる常套的な手段は、操作的定義という概念に訴えることである。**XX** はたしかに民間心理学にも現れるが、ここでは操作的に定義された科学的概念である。**XX** が高いということはすなわち、このテストのスコアが高いことに他ならない。

しかしながら、このように操作的定義の概念に依存した答え方は非常に危ういものである。ヘタをすると、心理測定をトートロジカルなものにしかねないし、そうでなくても、同じ心理的属性に対して複数の尺度が提案されるという事態を意味不明なものにしてしまい、よりよい測定尺度の提案という作業を不可解なものにしてしまう。

心理学の理論的概念の多くが操作的に定義されているのは事実なので、ここで問題なのは、操作的定義とは何かという理解の方である。操作的定義の概念は物理学者のブリッジマンにより導入された。これを論理実証主義者は、理論的言明の意味論的還元のための装置として用いた。その過程で、操作的定義は理論語を観察語のみで明示的に定義することとされ、その後「定義の数だけ温度があるのか」といった批判を招くことになった。

近年、Hasok Chang (2004) は温度測定の科学哲学について論じる中で、こうした戯画的な操作的定義の理解に異議を唱えている。本報告では、このように再評価されたブリッジマンオリジナルの操作的定義概念を心理尺度に適用することによって、操作的に定義された概念の实在論的理解可能性について論じる。